

## 40歳からの古い支度



第一生命経済研究所 専務取締役  
江崎 正志

横浜の高台にある家で長年二人で暮してきた両親が、4年前に認知症を発症し、在宅介護を経て2年前に二人一緒に同じ介護施設に入所した。これでやっと一息つけると思ったが、「残された家」への対応は、意外に時間もお金もかかるものであった。このことは、以前筆者が「老親の施設入所と残された家」(『Life Design Report』SUMMER 2014.7)で述べたとおりである。両親の介護をしてくれる施設に必要な費用だけでも、毎月かなりの金額になるが、両親が介護状態になるとほぼ同時に子どもは地方の大学に進み、未だに教育費が掛かっている。そうこうしているうちに、まだまだ先だと思っていた自分の定年も目前に迫ってきている。

こうした状況は自分だけに限らない。これまでの50代は子育ても一段落し、老後生活資金を準備する貯め時だとも言われてきた。しかし、今の50代は住宅ローンの返済に退職金の多くを充てたりすることなどで、老後資金の準備ができない中、子どもはいつまでも「自立」、「自活」できないでいる。老親の介護もある。公的年金だけあればどうにか暮らせた時代はとうの昔となった。晩婚化、晩産化で子育てが終わる時期がずれ込み、子育てと親の介護を同時にしなければならない世代が増えている。家計は「子どもの教育費」と「親の介護費」に「自分の老後資金作り」の三重苦である。

ところで、最近「古い支度」に関する本や雑誌がいろいろ出ている。「古い支度」という言葉には、「断捨離」、「親の家を片づける」であるとか、「終の棲家」、「終活」というようなことも含んでいるのだろう。そのタイトルのほとんどが「50歳からの」、「定年前後の」というように50代、60代からのものであるが、40代のうちにやっておきたい、40代の時にしかできない「古い支度」がいくつかあるような気がしている。

まずは、老親が元気なうちに、離れて暮らす親の終の棲家や介護、葬式、遺産などをどうするか親子で本音で話し合っておきたい。場合によっては家族会議を開くこと

も必要だろう。自分が50代、親も80代になると長年住み慣れた環境から今更移りたいとは思わないだろう。移るなら自分が40代、親は70代のうちだろう。介護についても、40代だと「介護はまだ先」という意識が強いが、実際はある日突然やってきて、もう「待たなし」の状況になる。在宅か施設のどちらを希望するか、両親が元気なうちに聞いておきたい。

二つ目は、「パパ友」、つまり子どもたちを介して知り合いになった父親同士の交流である。これを深め、地域ネットワークづくりのきっかけにしたい。例えば、子どもたちの学校で父親を中心に集まりがあったり、子どもたちが同じスポーツチームに参加していることで父親同士の交流が始まるケースがある。定年を機に地域に友人・仲間を作っていこうとする話はよく聞くが、退職してから新たに地域に溶け込むのは至難のワザである。しかし、40代のうちに子どもたちを介したネットワークを形成することで、必然的に地域と繋がるケースが多く、期せずして地域活動に参加するよい機会になっている。

三つ目は、「60歳からの定年後」のためにではなく、「40歳からの人生の後半」のために、キャリアアップ、キャリアデザインすることで、新しい分野に挑戦してみてもいいということである。40歳は「人生の折り返し点」でもあり、「仕切り直しの時期」でもある。今や人生の前半と後半で全く違う二つのキャリアを経験することも、仕事にも社会活動にも同時に積極的にかかわるパラレルキャリアに挑戦することも十分可能になった。ただ、40歳ぐらいになると学生時代から培ってきた能力や蓄積を使い切っているので、もう一度しっかりと勉強し、充電し直さないといけない。40代の10年をどう過ごすかによって、その後の人生に大きな違いが出てくる。

当研究所が定期的に行っている「今後の生活に関するアンケート」調査によると、「人生設計ができていいる」あるいは「考えている」人の割合は、2010年調査では45.0%だったものが本年1月に実施した調査(速報値)では57.6%と5割を超えた。一方で、高齢期の望ましい居住形態として、「子どもと同居する」、「二世帯住宅に住む」、「近隣に住む」はこれまでと同様に減少したものの、どちらかと言うと増加傾向にあった「一人で暮らす」、「老人ホーム等の施設に入る」が今回は減少し、その分「分からない」が27.5%から40.7%に大幅に増えている。先行きが分からないからと、暗く考えても、悲観的になっても仕様がなない。明るく、楽しく、夢プランがいっぱい詰まった人生設計をしていきたい。